昭和　年　月　日第3種郵便物認可
第261号　昭和42年3月10日発行（毎月10日発行）

昭和42年（1967年）
3月号（No. 261）
社団法人 日本山岳会

目　次

アトキンソンのことなど　望月達夫… 1
研究報告…… 2
遭難に関するシンポジウム
雪崩研究会の報告
昨年度富士山頂診療所の成果
頭巾について　田畑真一…… 2
知床半島における要望書
東条猛猪・井手貞夫…… 3
グロックナー山群高等学校の案内
中世古隆司… 3
本会所蔵絵画覚え書…… 4
主な海外登山―1967年Ⅱ…… 4
昭和41年度「この一本展」…… 5
第12回スキー講習会報告…… 5
会務報告
訃報（松方会長夫人）…… 6
チベット学者・多田等観氏逝く…… 6
転居先不明…… 6
会員異動…… 6
住所変更・住居表示変更
勤務先変更・氏名変更
代表者変更・退会・復活会員
電話新設
新入会員…… 7
加藤泰安氏の出版記念会…… 7
秩父宮記念学術賞…… 7

アトキンソンのことなど

望月達夫

先般来白水社から刊行されている「西域探検紀行全集」は、流石に深田久弥さんが監修者に名を連ねているだけに、書目も選定もよく訳文もよみ易くて、近頃の良心的な出版であると思うし、さらに各巻末に添えられた深田さん自身の解説が極めてすぐれている点が特にいい。九山々房に充満しているヒマラヤ及び中央アジアの諸文献は、おそらく個人の蔵書としては日本はおろか世界でも指折りのものと思うし、その多くに深田さんはよく目を通しておられるので前述の解説が充実し精確であるのは、当然といえば当然であるが、私は本文と共に毎巻これを読むのを愉しみにしている。先年完成された「ヘデイン中央アジア探検紀行全集」の解説の場合にも、このことがあてはまると思う。余談だがヘデインの全集のことは、本会報で殆んどふれていないことは残念に思う。

ところが今回第一巻のアトキンソン、ユーラシア横断紀行の解説を読むと、従来同様アトキンソンの著書についてはよく書かれてあるものの、肝心のアトキンソンその人についての記述が極めてものたりぬことに気づいた。相当調べられたが判らずじまいだったものと判ずる。

私は曾てアトキンソンのことをマムの「アルパイン・クラブ・レジスター」でみた記憶がある。早速その第一巻をとり出してみると間違いなく、その五頁から七頁に亘って、かなり詳細に出ている。深田さんはレジスターをお持ちの筈だと思うが、まさかアトキンソンがACの会員であろうとは気づかれなかったのであろう。レジスター第一巻を見れば判るという点を指摘すれば、私のペンをとった動機の大半が終るのだが、会員中にも既に稀覯書となったレジスターを御所有の方は余り多くないと思うので、アトキンソンの略歴を概述してみよう。

＊

一七九九年三月六日誕生。名もない家の出で、幼時に両親を失い八歳の年齢から自活をはじめた。

煉瓦工や石切工となり、後に石屋で且つ石の彫刻家となり、セント・メアリー教会（一八一九年）その他で立派な仕事をした。ある時期アシュトン＝アンダー＝ラインで図画の先生をしたこともある。

一八二七年建築家としてロンドンに居をおく。一八二九年、「イギリスの諸教会から選び出されたゴシック装飾品について」という一書を刊行。一八三一年、ロウアー・トゥーティングのセント・ニコラス教会を建築し、その直後マンチェスター周辺で重要な仕事を始めた。その中にはマンチェスター・リヴァプール地方銀行の建物なども含まれる。一八三五―四〇年、マンチェスターに居住し、その地方の建築上の鑑賞にいちじるしい影響を与えた。その地での彼の主要な仕事はチェーサム・ヒルのセント・ルークス教会であった。一時ロンドンに帰り、一八三〇、三二、四〇年にロイヤル・アカデミイで建築上の素描画を展示し、また一八四二年、ムーアシェデバッドのナウォーブ・ナジムの宮殿の二枚の絵を展示した。

この時分に、彼はセント・ペテルブルグのある記念碑のデザインに応募し入選した。よって彼は一八四六年ロシアにおもむき、ニコラス皇帝の信用を得て高遇され、ロシア領の全アジアのうち何処でも望む所を旅行し且つ描いてよろしいという、前代未聞の勅令による稀れな特権を得た。それについて、ロシア皇帝は南シベリアの或る事情について独自の証拠を得たいと欲し、アトキンソンが密偵として振舞えることを期待したとも想像されている。彼は一八四八年二月、行程約六万四千キロ、約六年に亘る長途の旅行に出発した。彼はイギリスにその妻を残したが、出発に先きだってセント・ペテルブルグにおったイギリス人のある女家庭教師とイギリス大使館の教会で結婚し、彼女を旅行に同伴した。一八五三年に彼は帰還し、ついでイギリスに戻り、ブロムブトンのホーク・カテイジに居住した。彼はその旅行から数多くの水彩画と大きな油絵を何枚かもたらした。

一八五八年彼は「中央アジアの火山」と題してブリティッシュ・アソシエーションで講演を行い、また「東及び西シベリア、シベリア、蒙古、キルギス・ステップ、支那領韃靼及び中央アジアの一部における七年間の探険と冒険の紀行」と題する一書を公けにした。一八五八年イギリス地学協会のフェロー、一八五九年地質学協会のフェローとなる。一八五九年、「支那領韃靼のアラタウ及びアクタウ山脈における高い峠越えの旅」と題する一文を地学協会の記要に載せた。一八六〇年、「シベリアの含金砂で発見された青銅の遺物について」の一文を地質学協会誌に載せた。

一八六〇年、彼は第二著を刊行した。標題は「上部及び下部アムール地方の旅行及びインドと支那の国境におけるロシアの獲得物」と云う。（今回邦訳されたものがこれである。）しかし、彼がアムール地方を訪れたことはいささか疑問があり、本書の材料は一八五九年に刊行された同地方を扱ったロシアの書物からぬきとられている。二度目のアトキンソン夫人は一八六三年に「韃靼のステップとその住民の思い出」という一書を上梓した。

アトキンソンは一八五九年四月十九日、年齢六十歳を過ぎてACに入会しているが、その資格はレジスターには何も書いてない。その高地アジア旅行であろうと想像する以外にない。死去は一八六一年八月十三日で、従って会員籍にあったのは僅か二年余の短日月であった。

なお「ディクショナリー・オヴ・ナショナル・バイオグラフイ」と「モダーン・イングリッシュ・バイオグラフイズ」に彼の記述があり、サー・フランシス・ゴールトン（同じくAC会員）の「わが生涯の思い出」一七六頁を見よとも書いてある。

以上がレジスターの記載であって、AC会員のなかでも変り種の方だったと思われる。

＊

なお序でだが、深田さんの解説のなかに（四三三頁下段）「東はコーカンドから西はバイカル湖におよび……」とあるのは東西が反対に誤まられたものか、一寸おかしい。アトキンソンの名がウイリアムとなっているのもウィトラムが、またボーグルはボーグルが正しい。版を改める機会があれば、他の内容が優れているだけに訂正されるようお願いする。

また、この機会に私は本全集及び前のヘデイン全集を通じ、Mus-tagh が「ムス・ター」とグをサイレントに書かれている点を指摘し、識者の教えを請いたい。両書共に東洋文庫の東洋学者が参加されておられるので、おそらくその指示によるものと思う。この言葉はツルギ語族の言葉で東トルキスタ

（7頁3段へ）

☆研究報告☆☆☆

遭難に関するシンポジウム

遭難対策委員会と支部の共催で、東京支部創立二十周年記念行事の一つとして遭難に関するシンポジウムが、十二月十日（土）午後二時から、青山学院大学六号館、六二一番教室でおこなわれた。これは遭難対策委員会が昨年度より計画していたもので、遭難は気象条件その他のいろいろなファクターによっておこるが、そこにはまず人間的な条件、原因が多く潜んでいる。われわれはいままで登山するもの自身、登山家の立場からこの問題を取上げて来たが、今回はもう一歩進んで、哲学、心理、生理、教育などいろいろな角度から、遭難という現象を分析し、そこに内在する問題を指摘し、そこから登山するものの反省を促していこうということであった。講師には、

哲学—東京外語大教授　串田孫一
心理—東京歯科大教授　秋山誠一郎
生理—東京教育大教授　小川新吉
社会—東京教育大教授　竹之下休蔵
教育—慶応義塾教諭　河村博通
行政—文部省スポーツ講長　松島茂善

の諸氏をお願いして、司会には常務理事の辰沼広吉氏が当った。串田氏は登山者自身の物の考え方の真剣であると同時に狭いことを指摘され、秋山氏は心理学の立場から登山者の性格が、クレッチマーの分類による「そううつ型」と「分裂型」の中では分裂型に類することを指摘、その中に登山者自身の性格を分析することから遭難につながるものが存在することを指摘された。また小川氏は生理学の立場から、登山者が多くのスポーツマンの中で著しく体力の劣っていることを示し、登山が強度の運動であるのにトレーニングの不足していることを指摘された、河村氏は教育者として、現代の登山に教育の不在を指摘し、また松島氏は行政の責任者として、現在おこなっている行政の問題点を示された。

二時から五時すぎにわたる長時間のシンポジウムであったが、二百人近い参加者から熱心な質問が出され、時間の少ないことが歎かれた、槙有恒氏、深田久弥氏、小島六郎氏等長老の方々が熱心に質問に参加され、若い学生の参加者も大いに啓発された。山岳会ならではと感じさせられるような集りであった。散会後も参加者の中からも、関係者の中からも、この種の催しが今迄少なすぎた、もっと盛んにおこない、今日の課題も一つずつを一日かけてとりくむようなプログラムがほしいということもきかれた。（文責・徳久球雄）

雪崩研究会の報告

冬山シーズンを前に、本会では調査研究・学生部・集会・三水会の各担当者が相談して十一月十六日、岸記念体育館で雪崩に関する小集会を開催した。講師には、金坂一郎氏を迎えた。内容はスイス雪崩研究所のアンドレ・ロック氏が、アルバイン・ジャーナルに寄せた「An approach to the mechanism of avalanche Realease」を中心に物体としての雪の性質、雪崩発生原因というものを物理的に、力学的に数式を使って説明された。加えて日本における雪崩遭難例の分類、遭難予防の原則、雪崩発生型式の特徴というものを実例をあげて質疑応答された。

その後、出席者の中から雪崩に経験の深い人ということで、日本雪氷学会元雪崩委員長の広瀬潔氏のユーモアに富んだ雪崩一般の話。大塚博美氏に明治大学の白馬の二重遭難、宮下秀樹氏に慶応大学の中岳の遭難、藤井運平氏に北海道大学の札内川、牧野内昭武氏に東京大学のキンヤンキッシュにおける雪崩遭難と遭難した当時の情況、その後の雪崩対策ということを話してもらい、出席者の雪崩遭難防止に関する注意をうながした。

出席者は冬山を目前に控えた学生部の会員も多く、熱心に聞いていた。参会者、一五〇名余。（川崎）

昨年度富士山頂診療所の成果

日本山岳会では、昭和三十五年以降、厚生省国立公園富士山頂地区管理休憩舎を借用して、夏期診療所を開設し、高所医学の研究と登山者の診療に従事してきた。診療所は、各山岳診療所中、文字通り最高所に位置しているので、高所医学研究の場としては最適であり、今までの研究、成果は既に体力医学会その他に発表されている。

今夏は、小屋の整備が遅れたので、七月二十二日に開所し、八月十五日までの二十五日間、開設した。期間中、慶応義塾大学医学部、東京医科歯科大学医学部の協力を得て、延三十二名の医師が参加して、研究と診療にあたったが、研究面では、東京からはるばる単を背負い上げて生理学的研究を行うなど、その成果が期待されている。

診療面では、男四一名、女二九名、計七〇名の診療を行なった。診療内容は別表の通りで、急性心不全の患者が不幸、死の転帰をとった他は、全て適切な処置を受けて無事下山し、各方面から感謝されている。

頭痛とある者も、広義では当然、類高山病の範疇に入るべきもので、類高山病が実に五三名。七五・七％の多きに達している。これを比較的高所に位置している白馬山荘、槍ケ岳山荘、燕山荘の各診療所と較べてみると、別表のように、類高山病の占める比率は、その何れより遥かに高率を示している。登山者の構成及び登山様式に、それぞれ特色があって、一概には論じ得ないにしても、高度の差が大きな要素を占めていることは明かであり、こういった面からも富士山頂診療所が、高所医学研究に適した位置にあることがわかる。

山岳会としては、元来、診療所の施設を高所医学に関心を持つ人たちに広く開放して研究に従事していただくことを本旨としており、来年度は、更に多くの人たちに入所していただいて、研究面でも、診療面でも、より一層の成果をあげるよう念願している。（長尾悌夫）

頭痛	34
類高山病	19
腹痛	5
悪心	1
疲労	3
風邪	4
外傷	1
急性心不全	1
その他	2

場所	類高山病	受診者総数	%
白馬山荘（2820 m）	214	634	33.8
槍ケ岳山荘（3000 m）	79	559	14.1
燕山荘（2763 m）	77	203	37.9
富士山頂診療所（3760 m）	53	70	75.7

◇大陸氷河◇
(Hielo Continental)

米国にいる Evelio Echevarria からいい参考書を送ってきてくれた。Buenos Aires Ediciones Mundo-uevo 発行(1960) 内容はパタゴニアの登山と探検、San Lorenzo, San Valentin, Don Bosco 登攀記、大陸氷横断、探検年表（1914～1960）。最後のものは、北部と南部の二つに分けられ、地図は三つ入っている。（吉沢）

頭巾について

田畑真一

『岳人』の第一七二号をひらくと、「山の豆講座」という欄がみえる。ここには登山に用いられた水筒について、その歴史的な変遷が簡明に述べられている。

これは、かつての登山風俗の一面をしのぶ有益な記事である。冒頭の一条を示せば、つぎの通りである。

「山伏のトキン、山人夫の竹筒、山回り役人のフクベと、水筒の山での歴史は古い。明治四二年に白山登山に鉄瓶を持参して便利だったと記録に残っている。大正末期には陸海軍の払い下げ品が、運動具店に形をかえて現われ、昭和二一年の終戦後には米軍や英軍の放出品の水筒が、登山者の間にはばをきかせていた。

しかし、この記事のなかには、誤りを指摘することができる。この記事が資料として正しかるべき性格のものであるときに、わたくしはその補正をこころみないわけにはいかない。そこで、あえて妄評を加えさせていただくこととした。

すなわち「山伏のトキン」の条であるが、これは後文の文意によれば、山伏が用いたいわゆる水筒であったことになる。いうまでもなくここにみえるトキンは、頭巾あるいは兜巾とあらわされる。その用途は、じつは山伏などが頭にかぶる小さなずきんのことである。したがって頭巾すなわち水筒とするのは誤りである。頭巾を水筒に代用することなども、不可能な話である。『人倫訓蒙図彙』には、頭巾をつけた山伏の姿が描かれている。また、手近な書物では、和歌森太郎博士の『山伏』に、頭巾そのものの図がおさめられている。あわせて参照していただきたい。（終り）

知床半島における第十一回全日本登山体育大会に関する要望書

北海道自然保護協会
会長　東条猛猪
理事長　井手賚夫

昭和四十二年度の全日本登山体育大会は、北海道山岳連盟の主管のもとに、知床半島羅臼岳より硫黄岳にかけて行われるということであります。

この開催に関して北海道自然保護協会は、知床の山岳地帯が一時に五百人を越えるが如き多数の山岳人の登山体育の場所としては狭隘であり、かつ同地帯が国立公園としても、最も未開の秘境であり、学術的にも誠に貴重であるが故に、これが荒されることを甚だしく懸念致し、昭和四十一年根室及び釧路において開催されたる本協会主催の自然保護に関する懇談会においても、出席の羅臼町助役及び釧路山岳会々長に対して、何分の御配慮を要請したるところ、既設のルートを使用するのみにて、決して自然を荒すようなことはしないという釧路山岳会長の言明を得たことであります。

それにもかかわらず、この計画遂行のために無許可に這松地帯を伐採するというが如き事件がその後に生じたということはまことに遺憾なことでありまして、我々としましては今後の計画の実施に関して深甚なる危惧の念を抱かざるを得ないのであります。

すでに過去に大雪山において催された国体登山においても甚だしくお花畑等が荒され、また空罐その他が乱雑に放棄されたという事実があります。

日本山岳協会の参加するこの度の催しに際しましては、十二分にその計画及び実施について、関係各当局とも御連絡の上慎重な配慮のもとに、登山体育大会が、また自然保護の上においても全国の範となるように、北海道山岳連盟の責任はもとよりでありますが、日本山岳協会においてもこの点に充分な配慮と責任とをもって実施せられることを特に希望致す次第であります。

申す迄もなく日本山岳協会は山岳を愛することにおいては、最も責任ある団体であるはずであります。その催しが単なるお祭騒ぎになったり、この機会を利用して徒らに観光的施設を促進し、重要なる国立公園を徒らに俗化せしめるような結果になることは、山岳協会それ自体の責任において阻止されることを、我々は期待し信じて止まないのであります。

さらに進んでは、むしろこの機会を利用して、参加者全員が、知床半島の学術的価値と、国立公園としての重要性を充分に認識して、自然保護の意味をよく自覚させることとなるように、この度の計画を配慮されるならば、我々の危惧が杞憂となってこの度の大会がより有意義なものとなるのであります。

関係各当局におかれましても、十二分の配慮をお願い致す次第であります。

十一月十六日
社団法人日本山岳会
会長　松方三郎殿

（編者注）本要望書の内容中、明らかな間違いと見られる名称については訂正しました。

× × ×

× × ×

ゲロックナー山群高山学校の案内

（5178）

中世古隆司

この度、オーストリアのグロックナー山群高山学校から左記のような入学案内が参りましたので御連絡します。

昨年東海支部の遠征隊がアコンカグア南壁を登山中、時を同じくして、独、墺、瑞、米、亜の五ヵ国人からなる国際登山隊を率いて来ていたのが、前記高山学長の校長 Ing. Fritz Moravec 氏でありました。

モラベック氏は日本ではあまり知られていませんが、その遠征歴は渓やましい程で、一九五四年ヒマラヤ・サイバルを皮切りに、アフリカ・ルーウェンゾリ、カラコラム・ガッシャブルムII、アフリカ・マウント・エルゴン、ノルエー・アークティス・スピッツベルゲン、ヒマラヤ・ダウラギリ、再びアークティス・スピッツベルゲン、イスラエル・バイブル島と殆んど毎年のように、どこかへ出かけています。

また著書に Gefahren und Gefährten. Weisse Berge-Schwarze Menschen, Dhaulagiri-Berg ohne Gnade 等があります。

モラベック氏は登山期間中であった故か、酒も煙草も嗜まず、氏が前進キャンプに入ると、ベースキャンプに残った連中が、我が隊に酒を買いに来る愉快な場面もありました。また遠征隊も、いかにも登山学校的で、熟達者から中級者に至るまで総勢一八人が、各自の技量に応じたルートに別れて登っていました。

なお入学希望者があれば、筆者（名古屋市千種区高見町五ノ三九）または直接高山学校へお問い合わせ下さい。会話は勿論独語が主体ですが、英語でも良く、また女性も歓迎するそうです。以下は東海支部員の湯浅道男氏の訳によるものです。

グロックナー山群高山学校
(Hochgebirgsschule Glockner-gruppe des T.V. "Naturfreunde")
○所在地　Gemeinde Kaprun, Salzburg, Österreich.

○何故、高山学校の教程に参加すべきか、という問いかけにグロックナー高山学校はお答えします。

熟達したアルピニストの指導と保護のもとに、貴兄は高山の経験をすることが出来ます。

短期間で、危険無く、貴兄は確実な登山家になるでしょう。

登山指導者は理解のあるザイルパートナーです。彼等は解り易く近代登山技術を教えます。

グロックナー山群高山学校は国際交流の場所であり、アメリカ、デンマーク、オランダからインドに至るまでの参加者が溢れています。

○期間　一九六七年夏期の開講期間は七月一日から九月十六日までの各一週間を単位とし、土曜日の夕食事時から開講して、次の土曜日の朝食時に終講する。

○初歩者のための基本教程
（資格）山を愛していること、健康状態が良好なこと　（費用）八五〇シリング（一シリングは一三円八五銭）内訳は、食費、宿泊料、傷害保険、ガイド料　（教程種目）ザイル・ワーク、岩および氷河における確保技術、ピッケル・ワーク、アイゼン・ワーク、中級山岳と氷河のツアー　（講義）装備、応急手当、気象知識、ツアー目的の携行用具の選択等について。

○上級者のための訓練課程
（資格）氷河を有する高山の経験者であること　（費用）八五〇シリング　（教程種目）アイステクニック、岩稜および雪壁の登降、岩と雪のコンビネーションの困難な山行　（講義）ルートファインディング、山の危険、栄養学、山行携行品の意義。

○熟練者クラス
（資格）氷河を有する高山および氷壁登攀の経験者であること　（費用）一、八〇シリング　（教程種目）モダン・アイステクニック、氷壁登攀、遭難救助、非常に困難な岩稜、岩壁の登攀、非常に困難な縦走、各々の場合にビバークを伴う　（講義）アルプスの構成、生理学、遭難救助。

○その他
教官は、初級コースでは受講者四人に一人、上級コースでは三人に一人、熟練者コースでは二人に一人の割で教授し、各々の教程終了者には、銅、銀、金の高山学校のバッジが与えられる。

H・Kで遭難（1966）

ベルギー、フランス、ポーランドの合同隊は、八月～九月にノシャックを中心とする周辺で活動していたが、隊長（Gean Bourgeois）、他二名がノシャック北面で雪崩にあい Gerzy Potocki は墜落死亡、残り二名は着のみ着のままで三日間吹雪に耐えビバーク、最後に隊長がBCにおり、救援隊を伴い Andrzei Heinrich を救出した。（資料・Adolf und Kurt Diemberger 親子より筆者に送られた私信及び、"Die Alpen"-Dez., 1966）

≪本会所蔵絵画覚え書≫

昨年の年次晩餐会には、本会所蔵の絵画十三点を展示し、会員各位の鑑覧に供した。

これらの絵は御茶の水に山岳会の図書室ができた時に寄贈されたものが殆んどであるが、ルームが移転してからは、絵を掲げるスペースもないため、倉庫に保管されてあり、そのために最近入会された人には、これらの絵を見る機会もないので、今年の年次晩餐会には、これらの絵をすべて公開展示して、会員各位に鑑賞して戴くことにしたわけである。

この機会にこれらの絵の由来等について調べてみたが、戦後の不自由な時だけに、会報にもスペースがないためか珍しい寄贈の事情等についての記事は、一、二のものを除いて殆んど見当たらず、不充分なものであってもこの機会に、是非とも記録に残しておく必要があると考えて筆をとった。尚誤まりがあれば御指摘戴き、又、新しい経緯を御存知の方はお知らせ戴けますれば幸である。（松田）

（一二一）**白馬岳**（油A—50号）

中村清太郎画伯の作品。加賀正太郎氏より、本会に寄贈されたもので、御茶の水の図書室に掲げられていたもの。

（一二二）**富士山麓**（油A—25号）

茨木猪之吉画伯作品、前記白馬岳と共に加賀氏より寄贈されたもの。

（一二三）**田代池の白樺**（油変型6号）

大正十三年夏日、神河内田代池途上にて、中村清太郎氏により描かれた逸品で、その後、小島烏水氏に贈呈された。小島烏水氏は、大変に気に入り自分の寝室に掲げ、多年に亘り愛蔵しておられたもので、その後翁の記念展覧会開催に当り、小島家より、本会新築の図書室に寄贈されたもの。

（一二八）**初冬の両神山**（油絵一〇号）

茨木猪之吉画伯、一九三八年の作品。初冬の抜けるような青い空を背景にした両神山を描いたもので、あざやかに区切られた稜線の面白味や、樺に色どられた秋深い山肌と僅かにみられる青木の対照が捨て難い。永年を山と取り組んだ画伯晩年の佳品である。この絵は昭和二十四年夏、会員高橋文太郎氏の御遺族から会に贈られたものである。（会報一四七号参照）

（一二四）**群猿**（墨絵）

石井鶴三画伯、昭和三年の作品で、「山岳」二十五年の表紙に使用されたもので、その後冠松次郎名誉会員が愛蔵されていたが、昭和三十九年冠氏より本会に寄贈されたものである。

尚「山岳」二十五年に冠氏はこの絵について次の様な説明を書かれている。

「昭和三年八月二十二日、石井鶴三、田中薫の両氏と共に、黒部川の東信歩道を棒小屋の小屋場へ下る途中、剣沢の大瀑布の見える処から、二町程で、群猿の嬉戯するのをみた。—（中略）—キャンキャンという叫び声をあげながら右往左往している群れ猿の数は、見えたのは十匹ばかりであったが、藪の中に隠れているのを合わせると、二十匹以上もいたであろう。」

（一二九）**ブカヒルカ・ノルテ**（水彩画）

渡辺九郎氏一九六一年の作品で、一橋大山岳部OBである。吉沢一郎氏から本会に寄贈されたものである。

渡辺九郎氏は幼少より水彩画を好み、兄、日本水彩画会員渡辺六郎氏の手ほどきを受け、石井柏亭画伯に師事す。入選は日本水彩展二回、双台社展五回、鉛筆着彩或は透明描法による本格的風景画を得意とする。

吉沢一郎氏がペルー・アンデスから帰国された直後、吉沢氏の写真をもとに描いた作品である。

尚吉沢氏によれば渡辺九郎氏は、昨年不慮の災難に遭われ他界されたとのことである。

（一二六）**針之木峠**（夏）（油絵）

茨木猪之吉画伯作品、昭和十九年画伯より、川喜田壮太郎氏が手鑑として譲り受けたものである。

その後、昭和三十九年秋、本会ルームが神宮前へ移転した際、新ルームにと、川喜田氏より寄贈されたものである。

（一三三）**後立山連峰**（水彩画）

昭和三十九年八月本会図書室移転に際し、近藤名誉会員が、中村清太郎画伯に、特に依頼して描いてもらったもので、近藤名誉会員の御厚意により、本会に寄贈されたものである。

（一二七）**徳本峠から穂高連峰**（墨絵）

石田吟松画伯作品。昭和三十九年のウェストン祭に際し、石田吟松画伯が、気に入った作品があるからと、佐藤久一朗氏に贈呈を約し、その後上京の折佐藤氏宅に届けられたものである。

その後佐藤氏より、本会に寄贈された。

（一三〇）**鳥**（墨絵）

石井鶴三画伯作品。「山岳」五十年記念号の表紙として、編集担当の交野武一氏が、特にお願いして描いて戴いたもので、「山岳」の表紙には、その後五十一年号にも使用された。

（一二五）**高原の湖**（油、一〇号）

茨木猪之吉画伯、一九二五年の作品。会員、磯野計蔵氏より本会に寄贈されたものである。

≪主な海外登山≫

—一九六七年—II

(4) **千葉岳連ヒンズークシ登山隊**

活動区域　ティリッチ・ミール及びイストル・オ・ナール周辺

登山目標　右周辺にある未踏峰

隊員　高島一芳（隊長・44）、千葉県市川市市川町一—二六—一五。有岡達郎（31）、小松鉱二（30）、仁科正純（28）、高野健次（26）、近藤理昭（25）、猪野保夫（24）、関谷宏（32）、青木敏雄（30）、石井勇（29）、他に医師一名。

日程　6・1（羽田発）、カラチ、ペシャワール、ディール経由、6・19（チトラル）、7・1（BC）—登山期（7・2—8・20）、往路を戻り、9・20（羽田着）。

総経費　八九二万円。

(5) **東京農工大学アンデス遠征隊**

Tokyo University of Agriculture & Technology Andean Expedition

活動地域　ワイワシュ及びビルカバンバ山群

登山目標　ヒリシャンカ（Jrishanka, 6126 m）、イェルーパハー（Yerupaja, 6634 m）の北壁、プマショ（Pumasillo, 6070 m）。

隊員　平田利英（隊長・39）、田中元（29）、古畑　博（28）、小林伸好（代表責任者、川崎市渡田町一—四、28）、加藤朝章（27）、和地陽二（26）、岩谷弘一（22）。

日程　5・2（横浜発）、リマ、チキアン経由、BC、6・8—7・7（ワイワシュ）、リマ、モレバタ経由、7・25（ヤナマBC）、7・26—8・14（プマショ周辺）、モレバタ、クスコ、中南米各地調査、クリストバルより乗船、10・7（横浜着）。

総経費　約七〇〇万円。

(6) **鎌倉山岳協会一九六七年西イリアン遠征登山隊**

(Japan West Irian Exp., 1967)

活動地域　オランイェ山脈（カルステンツのあるナッソー山脈の東方に当る）

登山目標　J・P・クーン峰（4570 m）、ユリアナ峰（4572 m）、その他、ウィルヘルミナ峰（4750 m）。

隊員　隊長・脇坂誠、他に五名。

日程　11・14（横浜より物資）、12・3（先発羽田）、ジャカルタ、ビアク、スカルノブラ、12・11（ワナメ）、12・13（本隊羽田発）、12・18（ノーチャに集結）、12・15—約一ヵ月（登山活動）、一九六八・1・15（ノーチャに帰着）一月下旬（空路帰国）。

総経費　四八〇万円。

(7) **日本ボリビア親善隊**

活動区域　レアル山脈

登山目標　ラウラニ群及びカカアカ（6094 m）

隊員　関田美智子、清水聡子、阿部正子

総経費　二三六万円。

（一三一—二）**アルプスの登山**（エッジング）二点

松方会長より、御茶の水の図書室が完成した際に寄贈されたもので、ド・ソーシュール以前の作品である。（以上）

昭和四十一年度「この一本展」出品目録

〔出品者〕　〔出　品　名〕

冠松次郎「猿のおがせ」（霧漢）
古沢　肇　池上秀雄編「立山千夜一夜」（全六巻）
川峰隆章　豆本「富士」
石原憲治　大町桂月「日本山水紀行」
町田立穂　木暮理太郎「東京から見える山々」
藤島敏男　Emile Javelle : Souvenirs d'un Alpiniste 1886
小野　幸　J. Auldjo : Narrative of an ascent to the Summit of Mont Blanc on the 8 th and 9th August, 1827
小林義正　P. Martel : An Account of the Glaciers or Ice Alps in Savoy. 1744.
坂倉登喜子　河田楨「静かなる山の旅」
牧野文子　「京都探検地理学会年報」第四輯
島田　巽　「南極記」
今井雄二　Elizabeth Jannings : The Mind Has Mountains. London, 1966
尹　官炳　「登高」白頭山
村井米子　富山大学術調査団「北アルプスの自然」「黒部川」
日高信六郎　Opere Complete di Guide Rey 1953～54.
渡辺公平　Francis Gribble : History of Mountaineering
田部重治「日本の山」（現代叢書）
松方三郎　小島烏水記念展覧会目録
深田久弥　朝日新聞スクラップ・ブック（一九三〇年カンチェンジュンガ登山隊記事切抜）
山崎安治　林和夫編「歩み」（有馬洋、葛西晴雄追悼）

尚、この一本に選定した理由、出品の内容についての詳細は、年次晩餐会当日出席者に頒布した「出品目録・解題」を御参照下さい。

☆第12回スキー講習会報告☆

東京支部

恒例の東京支部主催のスキー講習会は豊富な積雪と好天の下に、去る一月二一日より三日間にわたり、長野県山田温泉スキー場で開催された。

一月二〇日夜九時一〇分に東京駅北口前を貸切りバスで出発、翌朝四時山田温泉着、午前九時より開校式を行い、引き続いて講習を始めた。

技術に応じて、ABCDに分け、比較的に人数の多いBCの両クラスはそれぞれ二班ずつ、設け、合計六班を編成し、ベテラン講師により、午後四時まで能率よく講習が続けられた。

第二日目は、朝八時半より午後四時まで講習。引き続き好天で、その上、気温高く春山を思わせるような好い気分であった。夜八時より旅館大広間でミーティング。各講師の寸評と各班の受講生代表の感想が述べられた。

第三日目は、遥かに望む後立山に雲がかかり、寒風強く、天気の下り坂を思わせたが、それでも晴れ。前日の暖かさで融けた雪が、堅い氷雪と化した。午前中に講習を打ち上げ、午後一時三〇分バスで山田温泉を発ち、夜九時一〇分東京駅北口へ帰着した。

今回は、乾燥粉雪、軟雪、アイスバーンと種々の状態の雪で練習することができた。その上、好天気に恵まれて講習のピッチはどんどん上った。たいした怪我人も出ることなく、また終始なごやかな楽しい雰囲気で三日間を過ごすことが出来たのも、この講習会のみがもつ独特のものであろう。

今回の受講生は六八名。なお次の諸氏に講師ならびに役員をお願いし、その任に当って頂いた。この紙上を借りて御礼を申上げたい。

海野治良、星野　重、網倉志朗、安彦六郎、八重樫末太、鈴木郭之（以上講師）、広谷光一郎（ドクター）以上（マネージャー　関口周也記）

会務報告

東京支部

一月十一日（水）役員会

出席者　沼倉、堀川、小味、広谷、冨田、須田、野萩、戸野、野田、大西、鈴木和、関口、鈴木郭、松永。

1　議　事

(イ)三水会の件

一月三水会は「コーカサスの山々」立教大学OB山野井武夫氏のスライドと講演に決定。なお、二月は「アンデスの山」坂倉登喜子氏、三月には「ニュージーランドの山旅」山口節子氏に講演依頼の予定。

(ロ)第十二回スキー講演会の件

(ハ)支部役員の人選に関する件

(ニ)山岳会ルーム当番制について

特に土曜日の当番は拘束される時間が長いが、現在迄の資料によれば、来会者はほとんどない点と、当番員の多忙な点も考慮して担当理事に再検討を願い、改善して欲しい。

以上（松永）

一月理事・評議員会

（十二日・ルーム）

▽出席者・松方会長、渡辺副会長、理事―加藤、村木、大塚、松田、飯野、川崎、宮下、竹田、住吉、小方、広谷、長尾、竹内、倉知、評議員―吉沢、島田、深田、村井、石原、東京支部―沼倉委員

（以下委員）理事―平山、三枝、評議員―藤井、中屋

▽議事・報告事項

(1)　昭和四十二年度予算案検討の件

……（飯野）

昭和四十一年度の予算の推移、実行予算、現況に対比しての収入・支出の年度末の収支予想、翌年への繰越の見込等につき説明あり。昭和四十二年度の予算案については、常務理事会で審議してないので次回に検討することにする。

(2)　会員入会状況につき報告の件

……（松田）

昭和四十一年度の新入会員は、十二月末現在、予想より大分少ない。そこで、入会状況を分析してみたところ、学生部出身のOB、地方支部からの入会申込等が（東京支部も含む）非常に少なくなっていることがわかった。このままで推移すると、現在迄順調に増加してきた会員数の減少も考えられるので、積極的な努力が要望された。

(3)　各支部の現況につき報告（松田）

各支部の会員数、会費納入状況、支部活動状況、理事会への報告状況等につき説明あり。山岳協会一本化に伴う支部のあり方、本会の支部に対する考え方等につき検討がなされた。

(4)　昭和四十二年度役員候補者推薦の件

（加藤）

現常務理事会の、加藤、辰沼、村木、松田各理事の辞任申出に伴い、昭和四十二年度の理事会の構成メンバー等につき検討が行われた。過去二年間、理事会の若返りを急ピッチで行ったので、前記四名が退任すると、会員の年令構成からみて理事会の構成年令が若すぎるために問題もあるので、来年度は、理事会の年令層を上げた大型理事会を考えたらどうかとの提案が常務理事会案として出された。これにつき種々検討の結果、半数を大型化（現在の評議員の年令層）し、後の半数を若手とする構成がよいということになり、常務理事会において、この線にそって具体的に人選をすすめることにする。

(5)　山岳62年編集者推薦の件

望月現編集委員より、後任を早急に決めて、62年号の原稿依頼を行う必要があると再三に亘り要望あり。本件につき検討したが、適当な後任者が具体的に見つからないので、決まるまでの間、村木常務理事が事務代行にあたり、とり敢えず原稿依頼を行うことを確認する。

(6)　その他報告事項

①ラトガース大学冬富士登山隊来日の件

（松田）

二月に来日する予定なので、学生部に同行を依頼することにする。

②山日記

（竹内）

現在のところ売行は好調であり、近くアンケートの中の熱心な人をも加えて反省会を開催する予定。

③山岳62年号概算見積りの件

……（村木）

昨年より30頁近く増えるが、大体予算通りに出来る見込みである。

④吉野書記に対する退職金募集の件

……（飯野）

十二月末を以て精算し、募集金額は全て吉野氏宛に送付した。

（以上）

二月定例海外連絡委員会

▽日時　二月十七日（金）六時三〇分～

▽場所　本会ルーム

▽出席者　吉沢、丹部、芳野、神原、関口、鈴木、松田の各委員

（以下委任）三田、倉知、近藤、牧野各委員

▽議　事

(1)ラトガース大学冬富士登山隊来日の件。

二月下旬来日の予定であるが、国際文化会館にて歓迎会を行うことにする。担当、松田、関口

(2)韓国東国大学北アルプス登山隊の本会訪問の報告

（関口）

（会報二六二号七頁参照）

(3)ネパール大使館との交歓会開催の件

三月～四月に開催することにする

（担当、神原）

(4)定款英訳抄録の件

関口委員作成の原稿は、牧野委員→マライニ氏→英国大使館アドリアン・ホーラー氏のルートで校閲されて戻ってきたので検討の結果、本件は海外連絡案としては、一応終了し

（七頁三段へ続く）

訃　報

松方星野さん（松方会長夫人）

かねて療養中のところ、一月一日午前六時四十五分、結腸ガンのため東京信濃町の慶応病院で逝去されました。

葬儀は三日午後一時より、四谷の聖イグナチオ教会にて、おごそかにとり行われました。謹しんでお知らせ申上げます。

松方夫人からは、生前訪日外国人登山家の接待等、本会に対して多大の御尽力を戴いておりました。本会はここに深く哀悼の意を表するものであります。

チベット学者　多田等観氏逝く

多田等観氏（財団法人東洋文庫研究員）が二月十八日午前八時半、心筋こうそくのため、入院先の東大病院小石川分院で逝去されました。享年七十六歳。智蔵院釈等観法師。

告別式は二十一日午後二時から築地本願寺で行なわれたが、本会は、生花一対を捧げ弔意を表し、槙名誉会員、島田評議員、辰沼、松田理事、川喜田二郎、牧野四子吉、文子夫妻、マライニ氏等多数が参列し弔意を表した。

氏はチベット研究の世界的権威で、明治四十三年秋田中学卒業後、来日中のチベット高僧ツァワ・デドウ師にチベット語を学び、同四十五年インドを経てチベットに入った。セラ大学寺で約十年間仏典の研究を続け、ダライ・ラマ十三世の信任厚く内政顧問の立場にあった。

この間一九二一年の英国エベレスト登山の許可申請に対し、ダライ・ラマに許可を下すよう進言したことは、余り知られていないが、登山界にとっては大変な功績であったといえる。大正十二年帰国、東北大、東大、慶大、カリフォルニア大講師を歴任、昭和三十年、金倉円照東北大名誉教授らとの共同研究「西蔵撰述仏典目録」で学士院賞を受けた。

他に岩波新書「チベット」（昭和十七年刊）、「西蔵大蔵経総目録」、「西蔵仏画釈尊伝」（昭和三十三年刊）等の著書がある。

昭和四十一年秋の叙勲で、勲三等旭日中綬章を授けられた。

氏は本会に対し、常に協力を惜しまず、マナスル登山の際も、サマ事件に対しては、適切な助言をされ、サマの僧正にチベット語で親書を贈るなど、マナスル登山の陰の功労者でもあった。又、昭和三十年二月十四日の第一六三回の小集会では、講師として「河口慧海師追悼」の講演をされ（会報一七八号参照）、又会報一九五号には「最近の西蔵書」と題する書評を寄稿している。

自宅は千葉県市原市姉崎町字台二三五六。喪主は妻、菊枝さん。

ルーム日誌（42・1）

1・11（水）東京支部委員会
12（木）理事評議員会
18（水）三水会
20（金）海外連絡委員会
25（水）婦人部
他に土曜会 7、14、21、28日

加藤泰安氏の出版記念会

本会常務理事、加藤泰安氏の処女作品「森林・草原・氷河」の出版記念パーティが、一一月一七日、松屋サロンで二七三名の参加者を得て盛大に行なわれた。集った人たちは、いろいろな方面で活躍している名士が多く、泰安さんの交友のほどがしのばれた。その夜は、祝辞にかこつけて、ひやかされたり、旧悪をあばかれたりで、さすがの泰安さんも神妙な態であった。

（小方記）

秩父宮記念学術賞
第一次南極越冬隊が受賞

十二月一日午後三時、東京銀行協会銀行倶楽部で第三回目の秩父宮記念学術賞の授賞式が行われた。今回は、第一回のネパール・ヒマラヤの学術報告（京都大学生物誌研究会）第二回の大町山岳博物館の研究報告に続いて、西堀栄三郎氏（会員）以下十一名の第一次南極越冬隊に同賞が贈られた。式には、秩父宮妃殿下が列席された他に、本会からも、松方会長、三田副会長、槙名誉会員、芳野赳夫氏が出席した。

編集後記

☆第一頁の構成を又変えてみました。これは島田巽氏の案。この次は新会員成沢清氏の提案に従い横にしてみます。小野幸氏、前田浩氏、佐藤久一朗氏からも御意見がありました。次号のを御覧になってから、どれが一番よいとお思いになるか、御知らせ下さい。最後は役員会で検討して貰います。（吉沢）

（1頁下段より）
ンで広く使用され、且つ幾つかの方言もあり、スタインの見解によればトルコ語とはかなり異ると言われている。ただ私が戦時中ロシアの捕虜となっていたとき、カザークやウズベクの民族と屢々言葉を交わし、山という言葉を教わったとき、例外なく彼らは「ターグ」と発音し、氷のことはムスでなくムズとスを濁って発音していた、明白な事実があったことを附言し、ターグを何故にターと発音するように統一したか、お教え願いたいと思うのである。

（一九六六年十二月）

（五頁下段より）
たとみてよいので、この抄録は理事会へ提出することにする。

(5)その他

①クラブ・タイの件
松方会長より提案のあった本件は担当関口委員で、検討をすすめることにする。

②在日外国人会員に対するサービスの件
集会には、できる限り英文の説明をつけて案内することにする。

③山岳の海外送付先に、マライニ氏より申出のあったイタリー山岳会フィレンツェ支部を加えることにする

④海外より日本の山登りに大挙して来日する傾向にあるので、これらの対策につき協議する。

（以上）

昭和四十二年三月十日発行
東京都渋谷区神宮前三ノ三一 外苑コーポ内
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
頒価五十円 (404) 七六五七
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代 （201号～250号）金600円也
送料 別受け 金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道端2～15, 電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7, 電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15, 電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は 日本団体生命 へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話（352）1556・1557

あなたのネガから，大型パネル（枠）張り
お部屋の飾りに！ 贈りものに！
あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング（構図）で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料150円同封でご註文下されば到着後5日以内に製作発送いたします。
代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。
但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちにご返送申上げます。
山岳写真を
（本多善博）
本多写真工房
名古屋市南区柴田西町 1—16 電話（611）7047
■全紙半切 パネル張り ¥1,000
■全紙（新聞1ページ大） 〃 ¥1,500
■全紙2倍 〃 ¥4,000
上記以外のサイズ、または同時に多数ご註文の際は、ご照会下されば別にお見積り申上げます。